服に宿る、東京というカオス

JFW20周年を迎えて、私たちがもう一度見たいもの

東京でファッション・ウィークが始まったのは、Japan Fashion Week（JFW）がスタートするはるか以前、1985年にさかのぼる。「コム デ ギャルソン」や「ヨウジヤマモト」といった世界的なデザイナーたちも、かつてこの都市でショーを発表してきた。そうした土壌を引き継ぎながら、JFWは2005年に発足し、今年、20周年を迎えた。

この20年で、東京はどんな服を生み出してきたのか。日本のファッションデザイナーが手がける服の多くは、熱心な研究や計算された設計を特徴としながら、どこか風をはらむような“間”がある。“ハズシ”と言い換えることもできる。その“間”には、常に「これでいいのか？」という、デザイナーたちの模索があるようだ。

西洋の服が持つ階級性や形式を引き受けつつ、そこに時代や個のフィルターを通して、東京は独自の再解釈を重ねてきた。日本には洋服文化のルーツがないからこそ、外からの視点で服を捉え、敬意を払いながらも大胆に壊して、現代的な意味へとリ・デザインすることができたのだ。

その解釈はこの20年のあいだに、社会の変化や世代交代、テクノロジーの進化とともに形を変えてきた。だからこそ、その集合体は一言でいえば、“カオス”。ベクトルは多方面に向かい、時代や社会を反映しながら、それぞれの存在理由を持っている。それでも、俯瞰して見れば、いくつかの大きな流れが浮かび上がってくる。20周年という記念すべきこのタイミングで、キーワードを手がかりに「東京の服」の軌跡を少し振り返ってみたい。

たとえば、「カワイイ（KAWAII）」。東京の“カワイイ”は決して無邪気ではない。ピンク、チュール、レース、キャラクター。そのやわらかさの奥に潜むのは、少女の静かな反抗心と身体性へのアプローチだ。たとえば肌を見せること。西洋の服がそれを「セクシー」と捉えるなら、東京ではそれさえ「カワイイ」のカオスの中へと取り込まれる。袖を通す者の、傷つきやすく繊細な内面に寄り添うような服では、しばしば手仕事が大切な役割を果たしている。

「テーラード（TAILORING）」には本来、体の構造や衣服の機能、着用シーンにおけるマナーを反映した多くの“ルール”がある。東京のデザイナーたちは、それを探求心の赴くままに解体し、ときに和の要素を組み込み、手仕事やデジタル技術を用いて再構築する。結果として、権威からの自由の象徴となり、男らしさ／女らしさも超えて身体に寄り添い、着る者の内面を際立たせる。東京のテーラードは、時代に即した強さの再定義の象徴。その根底には、固定観念に縛られず自らの美を見出す、ルールなき美意識が流れている。

「ミリタリー＆ワーク（MILITARY AND WORK-WEAR）」。かつては戦場や作業現場で機能性を最優先に設計されたこれらの服は、東京では日常のリアリティを映すモードへと変化した。ヴィンテージをひも解き、歴史に忠実でありながら、スポーツや愛らしさといった東京らしい感性を重ねることで、階級・労働の象徴は現代の都市生活の服へと転換されていく。さらに、アニメやゲーム、音楽といった日本独自のサブカルチャーが融合することで、ミリタリーやワークウエアは、現実と幻想を行き来する服として進化をする。

日本には多くの歴史ある繊維産地があり、独創的なファブリックは東京のデザイナーたちのインスピレーション源となっている。そのひとつが「デニム（DENIM）」。アメリカへの憧れに端を発するデニムと日本の関係性は、デザイナーたちが生地職人とともに重ねてきたトライ＆エラーにより、やがて“ジャパンデニム”と呼ばれるひとつのジャンルを生み出した。古着、裏返し、加工、ほつれといった試行錯誤の工程には、オリジナルを超えようとする挑戦がある。東京のストリートに似合うデニムは、労働着でも定番でもない、解体・再構築を経て生まれた新しいカテゴリーと言えるだろう。

そして「ドレス（DRESS）」。セレモニーや階級のためのドレスは東京には必要ない。では、揺れる裾や透ける布、流れるようなシルエットは何のためにデザインされるのか？東京のドレスは、華やかさを超えて、着る人の内面やカルチャー、現代女性の強さを映し出す位置づけとなっている。そしてもうひとつ、東京のドレスはクリエイションの実験室でもある。AIを活用したパターンメイキングや、水を使わないデジタルプリントといった未来志向の服づくりのアプローチが、ドレスというキャンバスに花開く。

東京のデザイナーたちを一括りにすることはできない。あえて共通項を挙げるなら、着ることを楽しみ、服というプロダクトを愛おしむその態度だろう。意匠や素材、ディテールへの極端とも言えるこだわりは、日常のための服に独特の強度を与えるからだ。東京の最高峰のクリエイションが集まるJFWという場は、これからも、複雑で個性あふれる世界の継ぎ目となり、未来を紡いでいくに違いない。

【協力（五十音順）】
粟田真紀子／エディター＆ライター
麥田俊一／売文業
向千鶴／ファッション・ジャーナリスト
村上要／「WWDJAPAN」編集長
【監修】
一般社団法人日本ファッション・ウィーク推進機構

【問合せ】
一般社団法人日本ファッション・ウィーク推進機構
東京都渋谷区広尾1-6-10 Giraffaビル 6F
TEL: 03-6805-0965
Mail: jfwpress@jfw.jp

KAWAII

3

7

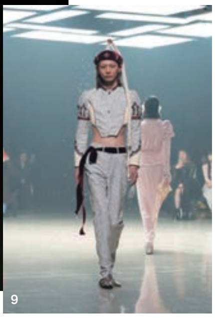
8

4

13

11

1


9

5

6

10

12

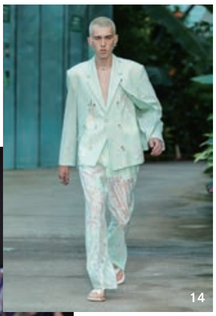
14

2

1: Chika Kisada 2025 A/W
2: CUNE 2013 S/S
3: FETICO 2024 A/W
4: JENNYFAX 2020 S/S
5: KEISUKEYOSHIDA 2017 A/W
6: KEITA MARUYAMA 2011 A/W
7: mintdesigns 2007 S/S
8: pillings 2022 A/W
9: tanakadaisuke 2024 A/W
10: TOMO KOIZUMI 2023 A/W
11: VIVIANO 2023 A/W
12: writtenafterwards 2016 A/W
13: YAB-YUM 2006 A/W
14: ANREALAGE 2023 S/S

* All photos, with the exception are property of ©JFWO

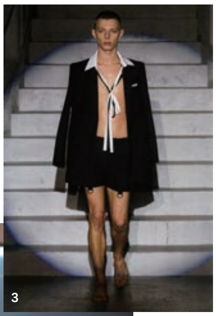
8


14

5

TAILORING

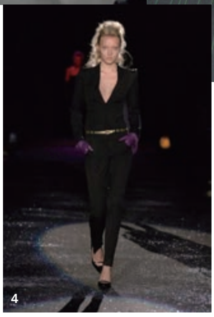
2


3

11

10

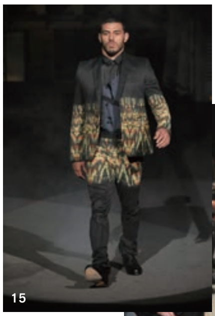
7


4

1

13

9


15

12

6

1: beautiful people 2014 S/S
2: CHRISTIAN DADA 2019 S/S
3: DRESSEDUNDRESSED 2020 A/W
4: G.V.G.V. 2006 A/W
5: HARUNOBUMURATA 2025 A/W
6: HATRA 2025 A/W
7: Hidenobu Yasui 2009 S/S
8: JOHN LAWRENCE SULLIVAN 2015 A/W
9: KANAKO SAKAI 2024 S/S
10: kolor 2022 S/S
11: SOSHIOTSUKI 2023 A/W
12: sulvam 2015 A/W
13: support surface 2022 S/S
14: TAAKK 2021 S/S
15: yoshiokubo 2011 S/S

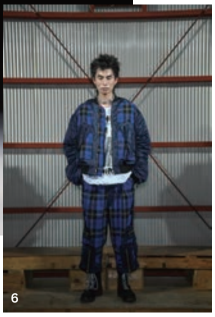
* All photos, with the exception are property of ©JFWO

MILITARY AND WORKWEAR

3

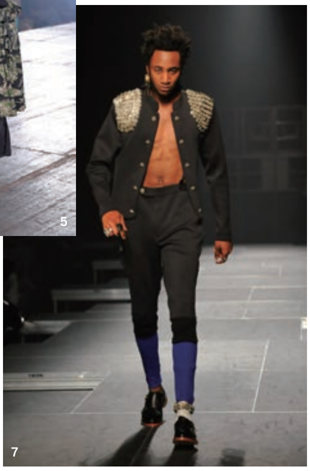
1

2


6

12

5

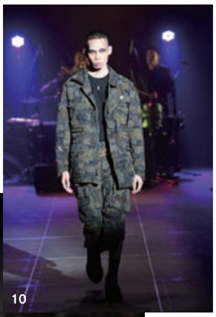

7

4

8

11

14


10

13

9

1: FACETASM 2021S/S
2: FACTOTUM 2010 A/W
3: HYKE 2023 A/W
4: MISTERGENTLEMAN 2018 A/W
5: N.HOOLYWOOD 2019 S/S
6: KIDILL 2018 A/W
7: TAKEO KIKUCHI 2015 A/W
8: YOHEI OHNO 2017 A/W
9: anrealage homme 2025 S/S
10: blackmeans 2022 A/W
11: HIDESIGN 2025 A/W
12: meanswhile 2025 A/W
13: ssstein 2023 A/W
14: UJOH 2015 A/W

* All photos, with the exception are property of ©JFWO

DENIM

1

3

14

4

5

8

7

11

12

6

13

2

10

15

9

1: doublet 2017 A/W
2: FUMITO GANRYU 2013 A/W
3: KAMIYA 2024 A/W
4: Maison MIHARA YASUHIRO 2016 S/S
5: M A S U 2023 S/S
6: Onitsuka Tiger x ANDREA POMPILIO 2015 S/S
7: PHENOMENON 2011 S/S
8: TANAKA 2023 A/W
9: Children of the discordance 2021 A/W
10: DAIRIKU 2022 A/W
11: DISCOVERED 2018 S/S
12: INSCRIRE 2023 A/W
13: MALION vintage 2022 A/W
14: SEVEN BY SEVEN 2024 S/S
15: WHIZ LIMITED 2012 A/W

* All photos, with the exception are property of ©JFWO

DRESS

8

4

1

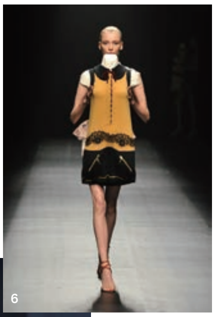
9

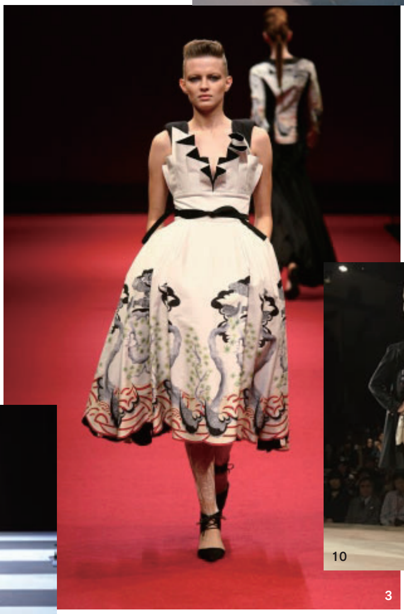
11

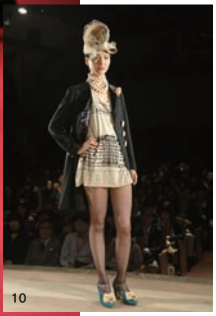
13

2

7


6


3


10

5

12

1: DRESSCAMP 2007 S/S
2: Hanae Mori manuscrit 2016 S/S
3: HIROKO KOSHINO 2009 S/S
4: Mame Kurogouchi 2018 A/W
5: matohu 2012 A/W
6: motonari ono 2013 S/S
7: SOMARTA 2008 A/W
8: TAE ASHIDA 2021 S/S
9: TELMA 2025 S/S
10: THEATRE PRODUCTS 2010 A/W
11: YUKI TORII INTERNATIONAL 2011 S/S
12: CINOH 2019 A/W
13: RYUNOSUKEOKAZAKI 2022 S/S

* All photos, with the exception are property of ©JFWO